

看護部の取り組み

ロナプリーブ病床の運用について

10東病棟 次席 水木宗一郎

2019年12月に発生した新型コロナウイルス感染症が猛威を振るう中、2021年7月19日に世界で初めて中和抗体療法「ロナプリーブ」が特例承認された。政府は製薬会社と協働し、速やかに供給が進むよう、取り組みを進めていた。

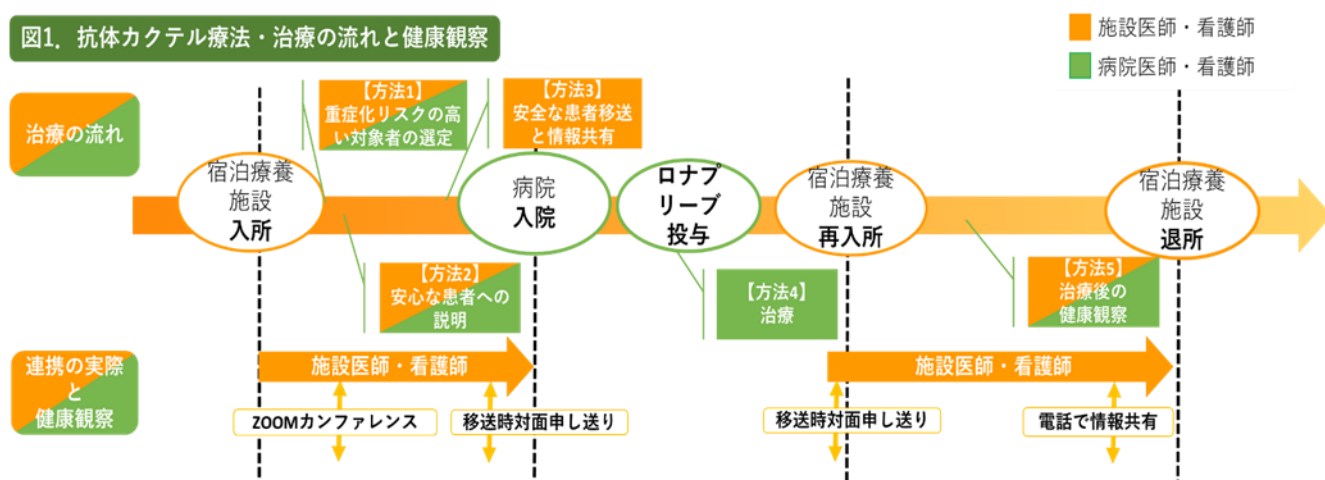
当センターにおいては入院患者のほとんどを重症化リスクの高い高齢者が占め、一刻も早く治療薬を提供できる体制整備が求められた。また、当センターでは患者宿泊療養施設への看護師派遣も行っており、連携して重症化リスクのある患者を受け入れることが求められた。

2021年9月より、空調工事やビニールカーテンの設置が施された専用病床の立ち上げを行い、センターと宿泊療養施設とを安全に移送するための方法について検討を重ねた。また、実際の療養環境を確認し、東京都(宿泊療養施設事務局)との調整を行うため、宿泊療養施設で直接の打ち合わせも行い、万全の準備を行った。

具体的な受け入れ方法としては、まず中外製薬のロナプリーブ適正使用ガイドに則り、宿泊療養施設看護師、病院看護師、医師と協議の上、治療対象者

の選定を行った。対象者に抗体カクテル療法の説明書を渡し、一読してもらった上で医師からの説明を行った。医師からの説明にはZOOMを使用し、リモートで同意を得た。治療希望者は専用車で病院へ移動し専門病棟へ入院後、再度医師が直接同意を取って治療開始となり、投与後の観察を含めて1泊2日の入院とした。治療後、退院時の診察で問題なければ、専用車で移動し、宿泊療養施設で療養を継続した。専用車で移動時は宿泊療養施設担当看護師が同乗した。

図1. 抗体カクテル療法・治療の流れと健康観察



ロナプリーブの供給及び在庫が限られ、病棟の人員配置の問題もあり、医療者間で慎重に優先順位を判断した上で対象者を決定した。治療対象の候補者は137名となったが、説明を受けて治療を希望した対象者は57名であった。宿泊療養施設にいる段階で十分な説明を行った結果、来院後に治療

の希望を取り下げた患者はいなかった。入院中副反応は見られず、宿泊療養施設に戻った後に症状が悪化したという報告もなかった。

また、患者からは「食事の暖かさが嬉しい」との声も聞かれ、宿泊療養施設での療養で閉ざされた環境を余儀なくされた患者の気分転換となった。

図2. 男女の内訳

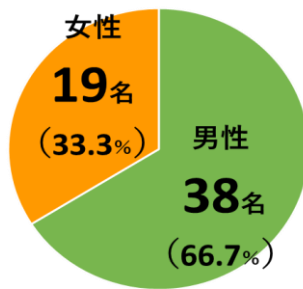


表1. 使用後の症状

内訳	件数 (名)
発熱	29
発疹・掻痒感	5
嘔気	2
胸部痛	1
頭痛	1
合計	38

図4. ZOOM連携時の様子

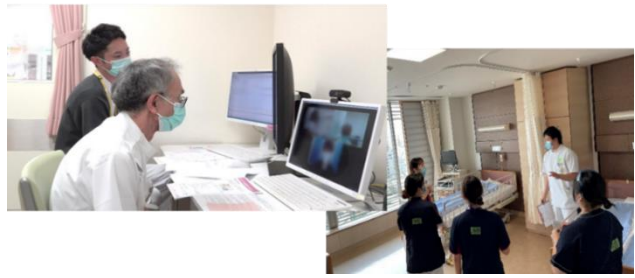
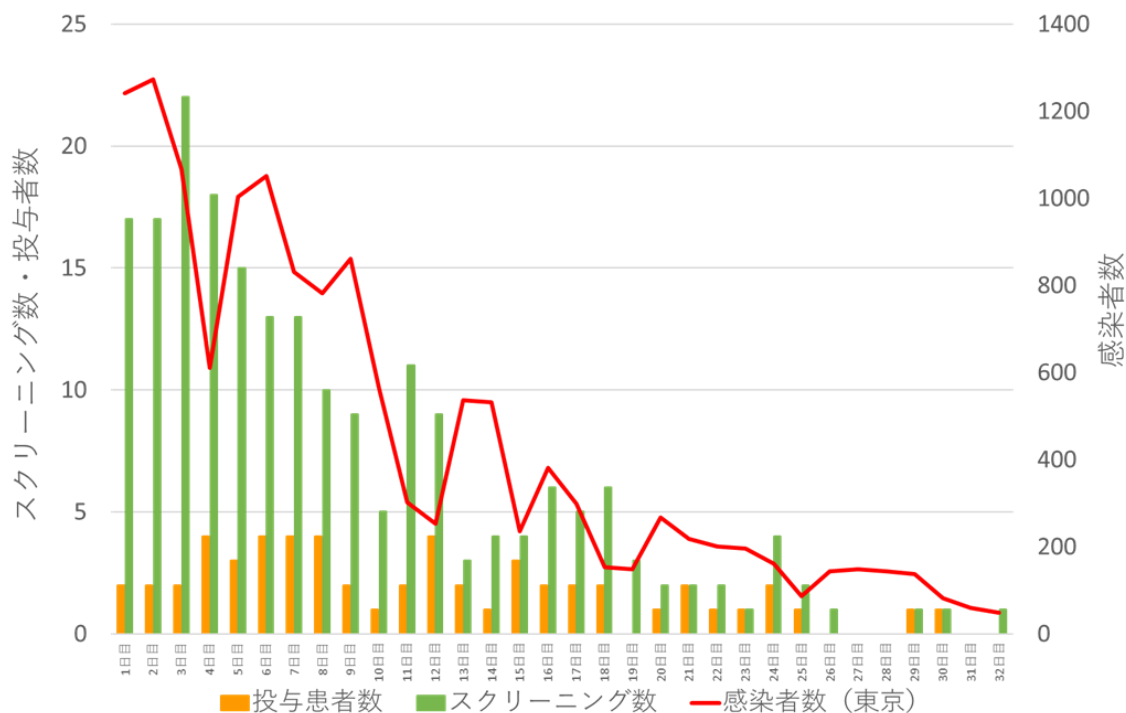


図3. 東京都の感染者数とロナプリーブ投与者数



東京都における抗体カクテル療養施設の準備が整うまでのつなぎ医療として、ホテルと病院と自治体という一連の流れをシステム化することにつながった。ゾーニングや移送方法の十分な検討、医療者間での慎重な対象者選定により、患者・スタッフともに安全な医療・看護を提供することが出来た。宿泊療養施設と切り離して治療の場を提

供し、十分な医療体制が整った病院で治療することで、不安なく治療を受けられ、社会との繋がりを再認識する機会ともなったのではないかと考える。今回の取り組みは宿泊療養施設の入所者への抗体カクテル療法を実施する施設としてのモデルとなりながら、中等症・重症化を最小限にすることに寄与できたと考える。